

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 29 年 6 月 6 日現在

機関番号：34504

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25380736

研究課題名(和文) ホームレスアセスメント技術の普及及び社会資源ネットワークの開発的研究

研究課題名(英文) Disseminating Homeless Assessment Skills and Developing Social Resource Network among Homeless Support Agencies

研究代表者

知念 奈美子(CHINEN, Namiko)

関西学院大学・人間福祉研究科・研究科研究員

研究者番号：80455039

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、ホームレス支援を目的とする団体ビッグイシュー日本および関連非営利団体ビッグイシュー基金と共に、ホームレス者とその生活状況の包括的な把握が可能となるよう、特に必要と考えられた臨床面重視のアセスメント・トレーニングを構成、実施し、スタッフの多角的なアセスメント・スキルおよび知識の向上に寄与した。本研究期間中のスタッフの離職・入職の繰り返しにより、アセスメント・スキルや知識の定着に困難が生じた結果、ホームレス支援団体の慢性的な財政難や、その結果としての専門職・人材確保の困難、高いボランティア依存が明らかとなり、今後のホームレス施策に対する問題提起へと繋がった。

研究成果の概要(英文)：This study aimed dissemination of social work assessment skills among homeless support agency staff. The author developed and conducted a training program, which focused on medical and psychiatric clinical knowledge, for Big Issue Japan and The Big Issue Japan Foundation staff. The training helped the staff build clinical perspective they needed for bio-psycho-social assessment. However, the high turnover rate throughout the research period led to findings such as financial difficulty of homeless support agencies throughout Japan, their chronic staffing shortage, and their dependency on unpaid, volunteer staff.

研究分野：ソーシャルワーク

キーワード：ホームレス 社会資源 ソーシャルワークアセスメント

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 21世紀を迎えて15年以上が経過したにもかかわらず、古くからの社会問題であるホームレスネスは厳然と存在する。世界中のどのような経済大国や高福祉国家であっても、全面的な解消に到達できていないどころか、近年は経済格差が一層進み、むしろ拡大の様相を見せているのがホームレスネスである。個人が、生活のほぼ全領域において欠乏や障害を経験するホームレスネスという大きな社会問題が、炊き出しやシェルターなどのような、応急的・対症療法的な援助だけで解決できないことは、日本で生活する人間にとっても皮膚感覚として捉えられている現実ではないだろうか。そのような圧倒的な現実に向き合う上で、ソーシャルワーカーは何をすべきなのかという問いから、本研究の目的は導き出された。

(2) 日本の経済成長にストップがかかり、以前のような右肩上がりの生活が望めなくなり、人々の人生設計の在りように大きなパラダイム転換が起きたのは1990年代初頭に起きたバブル経済の崩壊がきっかけである。中高年の男性を中心とした、ホームレスと呼ばれる野宿者や路上生活者の数が都市部で急激に増加し、非常に目に付くようになったのは、その直後のことであった。新宿駅周辺では1996年3月下旬の調査で359名の路上生活者が確認(岩田、1997)されており、バブル経済崩壊以前の推測値の3.5倍に増加していた。平成の世となって四半世紀以上が経ったが、そのバブル崩壊以降も経済危機は繰り返し、しかもグローバルな規模で訪れており、貧困層の拡大、国民の経済格差の拡大が声高に叫ばれるようになって久しい。ホームレスと呼ばれる人たちの属性も、最初に「可視化」(岩田他、2001)された時代からおおよそ20年経ち、路上生活者らの高齢化が見られると同時に、夜間、路上や河川敷ではなく24時間営業のインターネットカフェや飲食店に滞在することで「見えにくい」若者ホームレスが顕在化するなど、著しい変化が起きている。しかしながら、彼らに対する支援は未だにその場しのぎの対症療法の域を出ていないものが多い。

(3) ホームレス支援のために制定されたはずの「ホームレスの自立の支援等に関する特別措置法(以下、ホームレス自立支援法)」が対象としているのは、基本的に就労自立の意思を持つ、野宿生活を行っているホームレスである。ホームレスに就労を促すことで自立を助長するという観点からの「就労自立アプローチ」の施策は、「ホームレスの多様性に施策体系が合致していない」(山田、2009)ことや、仮に野宿生活から脱出できたとしても、住まいや仕事の維持には、煩雑でありながら重要な金銭管理や体調管理など大変な

労力と努力が必要となるが、そのような面に対するフォローアップが欠けているなど、柔軟かつ細やかな支援を必要とするホームレスの現状に合致していないという指摘が以前からなされていた。ホームレスを、社会のあらゆる領域や資源から究極的に排除された人々と見るなら、彼らに対する支援は、就労自立のみに重点を置いた画一的な支援プログラムよりも、生活全体を同時並行して総合的に立て直せるような、行政横断的な支援制度が必要であると考えられた。

## 2. 研究の目的

(1) 本研究の目的は、ホームレス当事者のQOLの向上・維持を目指して開発された、ソーシャルワークの視点を持つ、ホームレス者アセスメントツールを使用し、支援者にとって最も重要なスキルの一つであるアセスメント技術を向上および普及させることである。

(2) 社会的生物である人間を包括的に支援するソーシャルワークにおけるアセスメントとは、医療、心理などの狭い領域に限定せず、個人の状態とその生活の状況を、身体・心理・社会的な側面から、総合的に捉えることである。特にホームレス者は、住まいが無いという一点に問題が集約されているわけではなく、例えば年齢や心身の障害によって就労が阻まれている、頼れる家族や親族を持たないといったような、人生・生活におけるすべての領域に渡って欠乏や障害、苦難を抱えている。そして、そういった要因の負の相互作用によって野宿・路上生活を余儀なくされていたり、あるいは、いわゆる畳の上の生活に戻れずにいるケースが圧倒的に多い。そのような人々に対する支援効果を確実なものにするには、生活の全体像の把握が必要不可欠であるため、ホームレス支援における包括的なアセスメントの視点の普及を目指した。

(3) ソーシャルワークにおける身体心理社会的アセスメントの考え方に基づいた、ホームレス者のニーズに特化したアセスメントの視点を、最も当事者に近い支援現場のスタッフが獲得することで、アセスメント作業を通して支援の道筋を明確化することが可能になる。機を逃さずに中長期的なニーズにも対応した支援を提供することで、緊急対応・応急処置の域を超えた援助が実現する。それらを踏まえ、クライアントが住まいを構え、健康的な生活を送り、人生のQOLが向上するような、先を見据えた支援につなぐためのホームレス支援者向けアセスメント・トレーニングを構成・運営・普及することを目指した。

### 3. 研究の方法

(1) 研究代表者は、ホームレス支援雑誌出版・販売会社「ビッグイシュー日本」をフィールドに、これまでに行った研究において、ホームレス者の生活を包括的にアセスメントするツール「Colorado Coalition for the Homeless (CCH-COS) 修正日本語版 (以下、CCH-COS 修正日本語版)」を開発していた。このCCH-COS 修正日本語版を使用したアセスメントのトレーニング・プログラムを、特に臨床的な視点を重視した内容で構成し、ビッグイシュー日本・ビッグイシュー基金各オフィスのスタッフを対象に実施、およびスキル定着のためのコンサルテーションやフォローアップを行った。

(2) 心身の健康度や障害面を把握するための、臨床的な視点を含めたアセスメントのスキルを、ホームレス支援者や隣接領域の現場スタッフに普及させるための土台づくりとして、社会資源のネットワーキングを継続的に実施・フォローアップすることで支援現場におけるアセスメント・スキルおよび知識の広範な普及を図った。

### 4. 研究成果

(1) ビッグイシュー日本およびビッグイシュー基金の大阪・東京各オフィススタッフに対し、CCH-COS 修正日本語版アセスメント・スキル・トレーニングの実施、およびコンサルテーションや追加トレーニングといったフォローアップを行ったことで、それまでは対症療法的な視点で支援に当たらざるを得なかったスタッフたちに、多角的かつ臨床的なアセスメントの視点を導入することができた。

(2) ホームレス者には身体面・精神面に何らかの障害を負う者が圧倒的に多い。そのため、支援者には有形無形の障害の有無と、それらがクライアントの生活に及ぼす影響を把握する意識・視点が必要となる。目に見える身体障害、および本人が病識を持ちやすい障害については、情報収集しやすいものの、本人に自覚症状のない疾病の他、精神障害ゆえに病識を持ちにくいものをも含めて、障害のある可能性を念頭にアセスメントする態度についても、研究開始初年度に導入達成できた。

(3) 先に述べたように、身体障害・内部障害については、継続的なフォローアップ・トレーニングを通して、研究期間中に支援スタッフのアセスメント・スキルおよび精度の向上が見られた。精神障害については専門知識の少なさからアセスメントの困難は残され

ているものの、近年ホームレス状態の若者によく見られる発達障害については、スタッフの中に対応経験が増加していたため、最低限のコンサルテーションで、実際的な対応につながるような慣れや知識の向上につながった。発達障害を持つと見られるクライアントへの対応経験の蓄積が、精神障害全般に関する知識への糸口となりつつある。

(4) CCH-COS 修正日本語版アセスメント・スキル・トレーニングは、講義の他、ワークショップ形式を取り入れていたため、実際のケース記録を使用しての模擬ケース会議や、ディスカッションを通じたスタッフ同士の気づきも多かった。スタッフ本人らが、クライアントの情報共有の在り方次第で、アセスメントの精度が大きく左右される事実に気づいたことから、特に対応困難なクライアントに関する情報共有の再検討が積極的に図られることとなった。

(5) 研究期間中を通して、スタッフの退職・入職が繰り返されたことから、アセスメント・トレーニングによって彼らが得た知識およびスキルの定着・拡大の困難が浮き彫りとなった。特に精神科領域のアセスメントに関しては、必要な知識量やそれらのアセスメントへの応用力にスタッフの間でばらつきが見られ、その平均化も課題として残った。多くのホームレス支援団体における財政難は、専門職の確保を困難にし、慢性的な人材不足と高い離職率、高い無報酬ボランティア依存につながっている。制定当初から10年の年限法であったホームレス支援法の再々延長案、しかも延長期間の倍増に鑑みると、日本のホームレス問題が政府や国民の当初の予想を大幅に超えており、いかに深刻で複雑かが理解できる。スタッフ・トレーニングを通して明らかとなったホームレス支援団体が直面する現状に関する問題提起は、今後の日本のホームレス支援施策においても非常に重要である。

(6) 日本のホームレス問題の深刻度・複雑さが浮き彫りになった結果を受け、資本主義大国であり、ホームレス問題においても先進国とみなされるアメリカのカリフォルニア州ロスアンゼルス市におけるホームレス問題の現状について調査を行った。特に、市のホームレス対策および住宅政策の関連から明らかにすべく情報収集を進めた結果、近年の住宅市場の高騰により、2016年には路上生活者が前年比30%増の地域も現れていることが明らかとなった。また、地下鉄網の整備拡大により、路線に沿ったホームレス者の移動が活発になり、サンタモニカなどの主要観光地が、景観や治安の面から対策を迫られるといった新たな課題が生まれてきている。先の市長選時に行われた、ホームレス対策のための消費税引き上げ条例案が成立しており、

市民たち自身に、問題解決の一部を担わざるを得ないという明確な自覚があるとみられる。経済規模が世界第3位とも言われる大都市のロスアンゼルス市は、しかしながらホームレスをはじめとした貧困層への医療福祉関連社会資源が十分に整備されておらず、福祉システムが機能していない現実があり、すべてを自己責任として処理する社会の限界が示唆された。

#### 引用文献

岩田正美、路上の人々 新宿 1995～1996年、人文学報、281、1997、73-99

岩田正美、川原恵子、ホームレス問題と日本の生活保障システム、ソーシャルワーク研究、27、2001、166-173

山田耕司、ホームレス状態となった知的障がい者支援の現場から見てきたもの 北九州における取組みについて、ホームレスと社会 1、2009、92-101

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計1件)

Namiko, CHINEN, Mental Health and Assessment Issues of Homeless in Japan, The International Academic Forum European Conference of Psychology & Behavioral Sciences, 2014年7月26日, Brighton, United Kingdom

〔図書〕(計1件)

社会的困難を抱えるネットワーク委員会、特定非営利活動法人ビッグイシュー基金、社会的不利・困難を抱える若者応援プログラム集、2014、116

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

知念 奈美子 (CHINEN, Namiko)

関西学院大学・人間福祉研究科・研究科研究員

研究者番号：80455039

##### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

##### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：

##### (4) 研究協力者

( )